

一

次の――線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- ① 万葉集の歌をカシヨウする。
- ② 人の生活にはカシヨウしない。
- ③ 一点も与えずカシヨウした。
- ④ 皆でケントウした。
- ⑤ まるでケントウがつかない。
- ⑥ ケントウをたたえる。
- ⑦ キセイを発する。
- ⑧ 動物にキセイするダニ。
- ⑨ 人の一生の軌跡をたどる。
- ⑩ 名残を惜しんで別れた。

二 「ぼく」は、町内の、「ブラックキャット」という野球チームのメンバーである。次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。
なお、字数制限のある問題では句読点も字数に含むものとします。

練習はいつも川原でやる。雑草だらけだけど、かなりの広さだし、野球やサッカーができるていどには整備されている。

四、五年前、土手が産業道路になって、川原には工場が建ちならぶはずだったけど、町の人たちの長い反対運動で、そのままぼくらの遊び場になっている。町の人たちが署名運動したり、なんべんも請願にいたりした。ブルドーザーがきたときは、すわりこみまでやった。おっちゃんなんて、もうすこしでつぶされそうになったけど、動かなかった。

そうやって残された遊び場なんだけど、川原で遊んでる子って、このごろ、あまり見かけなくなった。

三、四年前までは、野球でもなんでも、場所を取るのがたいへんだった。場所取り合戦で、けんかもしょっちゅうだった。

「場所を取っつけ。」

と、上級生たちにいわれて、ぼくら、ほかのチームの子らになぐられたりけられたりしながらも、ホームベースにだきついてグラウンドを守ったこともあった。もちろん親たちにはしかられたけど、赤チンと青あざだらけになって、ほこらしく登校した。そんなこと、いまではうそみたいだ。

① 川原は、がらんとしてる。

ぼくらの使ってるあたり以外は、雑草がのびほうだいになってる。

その日、やくそくの二時に集合したときも、川原にはだれもいなかった。

ブラックキャットのメンバーの集まりも悪かった。

二時までにきちんと集合したのは、六年生ではキャプテンでキャッチャーの岸さん、サードのガンちゃん。五年生ではライトの洋太くん、センターの弓削くん、レフトの岬くん、そしてショートのはく、——全員だといいたいところだけど、かんじんのピッチャー吉野くんは、めずらしいことにちくだった。それでも、十五分くらいおくれただけで、あせだくになってかけつけてきた。四年生では補欠の誠、同じくケラぼう、ちよつと補欠にもむりみたいな二カちゃんだ。とにかく、レギュラーのファースト小田、セカンド中野の二

人は、なかなかすがたを見せなかった。

「レギュラーが、こんなことでいいんですか。」

と、ぼくはじりじりして、岸さんにいった。

「きょうは、練習はじめる前に、ミーティングやってくれませんか。② ぼくら、もう、うんざりなんです。」
と、ぼくはしつこくせまった。

「ああ、わかつてる。」

と、岸さん③もはらにすえかねたように、土手のほうをちらちら気にしながらいった。

「だけど、あいつらのいいぶんもきいてやれや。いいな？」

それで、ぼくらは二人がくるまで、柔軟体操を続けた。

しばらくやってたら、出前のとちゅうのおっちゃんが、「ブラックキャット、ファイト！」と、土手の上から手をふっていったけど、ぼくら、はずかしくて、いせい④のいい声もでなかった。

六年生の二人は、一時間近くもおくれてやってきた。ペロペロとアイスクリームをなめながら、ユニホームのボタンをペロんとはずして、のたらくたらとバットを引きずってやってきた。

「このばか暑いのに、やっぱ、やるのかよ。」

「喫茶店は最高だぞ。いかねえか。」

平気な顔で、そんなことをいった。

⑤ 岸さんは、なんにもいわない。ガンちゃんもだまつてる。

「むりしてやってもらわなくてもいいんだよな。」

と、ぼくはいつてしまった。そんないいかたで話し合いをはじめるつもりはなかったのだけど、むかむかしちゃって、とうとうけんかごしになった。

「てめえ、もういっぺんいってみろ！」

と、小田がにきび面をつきだしてきた。男性化粧品のおいがした。

「なんべんでもいうさ。」

⑥

ぐっとはらに力をいれて、おちついていったつもりだったけど、やっぱり声がふるえてしまった。

「このやろう、六年生に向かって！」

肥満ぎみの中野が、ほくのむねをどついた。ほくはあつきりふつとばされた。すごい力だ。これでヒットが一本も打てないんだから、どうしようもない。

「すもうにでも転向したら。」

と、ほくはのろのろと立ちあがりながら、にくまれ口をきいた。

「てめえ！」

中野の白い顔がぱっと赤くなって、ゆつくりとバットをふりあげた。

「暴力反対！」

と、洋太くんが大きな体で中野をはがいじめにした。中野がふりほどこうとしても、洋太くんは動かない。わめいてあばれる中野に、

「やめろ。」

と、岸さんがめんどくさそうにいった。

「ボールも打てないで、人間が打てるかよ。」

くだらねえというふうに、ぺっとつばをはいた。

ほくらは、あれ？ というような顔で岸さんを見て、ちらちら中野と小田をうかがいながら、はははとわらった。

「なんだよ、岸、おまえ、こいつらの味方する気かっ。」

と、小田がけしきばんでつめよった。

岸さんは、じろつと小田をにらみつけただけだった。

「しんぼうしてきたつもりだけどな、おれも、もう、おまえらにはうんざりだ。」

岸さんは、小田と中野をもういちどにらみつけて、

「ガンちゃん、もういいだろ？ あとは、たのむぜ。」

青バットにキャッチャーミットを通すと、ほくらをちらつとながめまわして、

「じゃあな。」

と、土手を登りはじめた。

⑦
ほくらはじようだんだんと思ってた。

でも、キャプテンの岸さんは、後ろも見ないでずんずんいつてしまう。

「岸さん！」

ほくらはびっくりして、口々によんだ。

「そりゃ、ないでしょ、キャプテン！」

「ブラックIIキャットは、どうするんですか！」

「——悪いな。」

と、岸さんは土手の中腹で、ようやくふりかえった。

「おれあ、キャプテンでがらじゃねえよ。もう、うんざりだよ。」

たったつと、身軽く斜面をかけ登って、土手の向こうに消えてしまった。

からっほの土手を見つめて、ほくらはぼうぜんとしていた。

そんなほくらを見て、きゆうに小田と中野が、へらへらわらいだした。

「かっこつけやがって。けつきよくは、わが身がかわいいのさ。」

「せいせいして、リトルIIリーグにいきやがったぜ。」

「頭は悪いけど、野球はまああだからな。」

「ブラックIIキャットのためなんてふりしてたけど、いままでは、リトルIIリーグの試験にパスしなかったんじゃねえの。」

「きまつてるさあ。でなきゃ、こんなぼろチームのために、だれがあくせくするかよ。」

二人が口ぎたなく岸さんをのしるのを、ぼくらはだまつてきいていた。

岸さんが精銳せいえいの集まるリトルⅡリーグにいたがっているといううわさは、ぼくらもきいていた。それだけの实力があることも、よく知っていた。それでも、万年びりのブラックⅡキャットをひきいてがんばつてくれると思って、すくなくともぼくは、岸さんをそんけいしていた。だから、小田と中野に対する不満も、岸さんがいつか解決してくれるんだと思って、ずっとしんぼうしてきた。

それなのに、このかんじんなときに、こんなかたちで投げだされるなんて――！

キャプテンてがらじゃない、と岸さんはいった。そのとおりだ！ と、ぼくは思った。岸さんは、キャプテンなんかやつちやいけな人だったんだ。一人で、ずっと、リトルⅡリーグをねらつていればよかったんだ！

だけど、そのキャプテンを信じてやつてきたぼくらは、どうなるんだ！ ブラックⅡキャットは、どうするんだ。

「解散だな。」

と、小田が勝ちほこったようにいった。

「だいたいよう、町内会の少年野球なんて、町内会のじいどもをよろこばせるだけだぜ。」

「健全な青少年の育成のために、とかなんとかな。」

二人はまたばかわらいをして、

「ブラックⅡキャット解散、決定！」

と、欽※きんドンのアクションをまねしていった。

すると、ずつとだまりこくつたガンちゃんが、バットをにぎつて、すつと立った。

「やめたけりゃ、ごたくならべずに帰れよ。」

バットを持ったうでをまつすぐにのびして、岸さんの消えた土手のほうをさししめした。

二人はびっくりして、ガンちゃんを見つめてる。

「本気かよ？」

と、不安そうな顔になった。

「そうさ、ふざけるんじゃないよ。」

と、ぼくはうれしくなってさげんだ。

「やめたいやつは、やめりゃいいんだ。ブラックⅡキャットは、おれたちが続けていくよ！」

⑧のか、⑨のか、よくわからなかった。みつともないけど、なみだでみんなの顔がぼうつとしてしまった。

「なにをそんなにりきんでるんだよ。」

「たかが草野球じゃねえか。」

小田と中野は、ガンちゃんとぼくのけんまくにとまどっていたけど、

「まあ、しっかりやれや。」

「たまには、さしいれくらいしてやるよ。」

と、へんにやさしい口ぶりになって、なんだかさみしそうに帰っていった。

⑩ ぼくらは、ぼかっとからっぽな気持ちになって、しばらく、夕焼けの土手をながめていた。

「ユーさんのいいかたは、きつすぎますよ。あれじゃ、だれだって、やめたくりますよ。」

と、誠が口の中でつぶやいた。

「もうちょっと、べつのいいかたがあつたんじゃないですか。」

かげじゃ、人一倍ひといちばい文句ばかりいつてたのに、あいつらがいなくなったら、こんどはぼくをせめてきた。

「えらそうなこというな。」

と、ガンちゃんがにらんだ。

「おまえ、あいつらに、なにかひとことでもいってやったのか。」

ガンちゃんは、めずらしく強い口調くちようでいった。誠はだまつてしまった。それで、ぼくは誠をなぐらずにすんだ。

みんな、つかれきっていた。グラウンドにぺたんとすわりこんで、てんでにぶつぶつとぐちをいった。

「みそこなつたよ。あんな人だとは思わなかつたよ。」

と、ぼくは岸さんのことばかりいった。

⑫「あんな無責任なキャプテンなんてないよ、そうだろう？」

と、ぼくは吉野くんにならずきかけた。吉野くんは、川原にきてからずっと、口をきいてなかつた。ぼくは、そのことも気になつてゐた。

「うん——、まあ。」

と、吉野くんはにえきらない返事をしただけだつた。

（あれ——？）

いつもの吉野くんらしくないな、と思つたけど、こんなときだから、みんな気がしずんでるのだろうと、ぼくはそれ以上気にもとめなかつた。

「ぐちいっててもきりがいいし、とにかく、新キャプテンを決めておこうや。」

と、やがて、ガンちゃんがいった。

もう日がくれかけていた。

「ガンちゃん。」

と、ぼくらはいつせいにいつて拍手した。

「ああ、気持ちはわかるし、おれも六年生ってこともあるしな。」

と、ガンちゃんは静かにいった。

「だけど、おれも、がらじゃないんだ。六年生を、だれひとり、ともに引っぱっちゃこれなかつたんだからな。——ブラックIIキャットがこんなになるまで、ほつぽつといたんだからな。」

さみしそうに、わらつた。

「もう、五年生が主力なんだ。五年生の中から選んでくれや。」

ガンちゃんが、こんなにしゃべつたのははじめてのことだつたし、心をこめていつているのが、ぼくらにもわかつた。ぼくらは、もうなにもいえなかつた。

「じゃあ、吉野くんしかないな」

と、ぼくはいった。みんなも、すぐにうなずいた。

「だめだよ、じょうだんじゃない。」

と、吉野くんがひどくあわてたように、きつぱりのことわつた。あんまり、もうれつなことわりようだつたから、だれもがびっくりして吉野くんを見つめた。

「ピッチャーやつて、そのうえ、こんなごたごたのめんどうまでみなきゃならないのか。」

と、吉野くんはけしきばんでぼくをにらんだ。そんなことまでやらされるんなら、やめちゃうぞ、といわんばかりのようすだつた。

ぼくはどぎまぎして、

「べつに、そんな意味でいったんじゃないんだけどな……。」

吉野くんから目をそらして、口の中でもごもごいつてみたけど、心がすうとひえていつて、なにかも、もうどうでもいいや、というような、ひどく白々とした気分になつてしまつていた。

（だけど、やつぱり、いふべきことは、はつきりいつておこう。）

しばらくあれこれ考えて、そう心に決めた。そして、いつた——、

「キャプテンがいなきゃ、ほんとに、ブラックIIキャットは解散じゃないか。だれが考えたって、中心になるのは吉野くんなんだし、だから——。」

冷静にしゃべろうとしたのに、そう意識すればするほど、気持ちがたかぶつて、とうとう、とちゅうでことばがつまつてしまった。

（どうして、みんな、「よし、やる！」って、いわないんだ！）

さげびだしてしまふようだった。それをしんぼうするだけで、せいっぱいだった。

みんな、うんざりしたように、うつむいて、だまりこくつてゐる。

「どうしたのさ、もう暗くなるよ、もう練習しないの？」

と、ニカちゃんが誠と、ケラほうにそつとささやいている。

だれも、なにもいわない。

⑫「おれは、長谷川勇が、キャプテンに、適任だと思う。」

と、とつぜん、ガンちゃんが、ことをくぎりながら、はっきりといった。

「異議なし！」

と、すかさず、誠がばかでかい拍手をした。

「異議なし！」

と、みんなもつられるように拍手をして、ぼくにわらいかけた。

「そうさ、きみしかないんだ。」

と、吉野くんも、目をふせたまま、おこったようにいった。

※欽ドン：一九七〇年代に流行した、テレビの人気バラエティ番組の名前。

(後藤竜二『キャプテンはつらいぜ』による)

問一——線①「川原は、がらんとしてる」とありますが、なぜ、川原が「がらんとしてる」のですか。理由を二十字以内で答えなさい。

問二——線②「ぼくら、もう、うんざりなんです」とありますが、何に「うんざり」しているのですか。その内容の説明として最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 川原のグラウンドが雑草だらけなこと

イ 上級生に場所取りをさせられたこと

ウ メンバーが集合時間に集まらないこと

エ 上級生が遅刻したりするやる気のなさ

オ ミーティングをしてくれないこと

問三——線③「はらにすえかねたように」とありますが、「はらにすえかねる」とはどういう意味ですか。「はらにすえかねる」の意味として最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 許せるはんいをこえていること

イ そのことに対する心を固く決めること

ウ 心の中に何か悪だくみを持つこと

エ 物事に動じないでいること

オ 仲間といっしょにたくらむこと

問四 — 線④「いせいのいい声もでなかった」とありますが、なぜですか。「いせいのいい声」が出なかった理由として最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雑草だらけのグラウンドで練習をしていることがはずかしかったから。
イ 試合ができる人数をそろえられないチームがはずかしかったから。
ウ キャプテンがしっかりしてくれないことがはずかしかったから。
エ 土手で「おっちゃん」にからかわれたことがはずかしかったから。
オ チームのまとまりがまったくなく、ことがはずかしかったから。

問五 — 線⑤「岸さんは、なにもいわない。ガンちゃんもだまつてる」とありますが、なぜ二人は黙っているのですか。その理由の説明として最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 二人のことをかばったあげたのに、感謝の気持ちを見せないのであきれているから。
イ 練習におくれて来ただけでなく、まったくやる気をみせないことに怒っているから。
ウ 練習をがんばろうとは思っているけれども、喫茶店に行つて涼みたいとも思っているから。
エ やる気のないことを怒っているけれども、上級生だからと思いがまんしているから。
オ もんくを言いたいけれども、キャプテンが注意するまでだまつていようと思うから。

問六 空欄⑥に入るのに最もふさわしい文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あんたは、練習をさぼって喫茶店に行く不良だし、化粧品くさいんだよ。
イ 上級生のくせして、下級生からこんだけ無視されてくやしくないのかよ。
ウ メンバーなら、キャプテンの気持ちを考えて、ちゃんと練習に集まれよ。
エ レギュラーなら、レギュラーらしく、まじめに練習したらどうなんだよ。
オ むりしてやっているから、練習がいやになるんだ。野球をすきになれよ。

問七 — 線⑦「ぼくらはじょうだんだと思つてた」とありますが、「ぼくら」は、「岸さん」がどうすることを「じょうだんだ」と思つたのですか。「岸さんが…」に続けて、十字以上十五字以内で答えなさい。

問八 空欄⑧・⑨に当てはまる言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア たのしい — くるしい
イ くやしい — さびしい
ウ さびしい — たのしい
エ うれしい — くやしい
オ やめたい — うれしい

問九 — 線⑩「ぼくらは、ぼかっとからっぽな気持ちになつて、しばらく、夕焼けの土手をながめていた」とありますが、このときグラウンドにいる「ぼくら」は全部で何人ですか。人数を数字で答えなさい。

問十 — 線⑪「あんな人だとは思わなかったよ」・⑫「あんな無責任なキャプテンなんてないよ」とありますが、「ぼく」は「岸さん」にどんなことを期待していたのですか。「ぼく」が「岸さん」に期待していたことが書いてあるところを、二つ、それぞれ二十文字以上三十文字以内で抜き出して答えなさい。

問十一 — 線⑬「おれは、長谷川勇が、キャプテンに、適任だと思う」とありますが、「ガンちゃん」がこのように発言した理由は何かと考えられますか。文章の内容からわかることをもとにして、三十文字以内で答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、字数制限のある問題では句読点も字数に含むものとします。

私は、星の進化や銀河の構造と進化、宇宙における銀河の形成など、宇宙に存在する天体がどのように生まれ、どのような進化をしているか、という問題を研究してきました。天体には、いつも重力（ニュートンが発見した万有引力のことです）がはたらいています。天体がこの宇宙に存在するためには、重力に反発する力も常にはたらいています。そうでないと、その天体は自らの重みでまたたく間につぶれてしまうでしょう。A、星の内部では一千万度を超える高温になっており、その圧力によってつぶれずにいます。すると、内部から外へ熱エネルギーが流れ出します。それで、星は輝くのです。外へエネルギーを放ち続けるかぎり、星は年をとっていきます。つまり、星は進化するのです。同じような理由で、星だけでなく、すべての天体は進化します。進化するからには、始まり（誕生、起源）があり、終わり（死）があります。B 宇宙の研究とは、誕生から死にいたる天体の一生を調べることだといえるでしょう。

私ははじめのころ、星の進化の最終段階を研究していました。やがて星が多数密集した銀河の研究に移り、今は銀河が散らばる宇宙の研究と、どういうわけか経験を重ねるにつれ、小さい天体から大きい天体へと研究の対象が変わってきました。興味の移るまま自然に研究対象が変わってきたのですが、それは天文学全体の流れでもあったようです。私自身が流行を追っかけてきたのかもしれませんが、一面では、まだ誰も手をつけていない問題を探してきたためでもあります。実は、それが私の科学の研究方法の一つなのです。

研究者には、おおまかにわけて二通りのタイプがあるようです。私はそれを、「微分型」と「積分型」と呼んでいます。「微分型」とは、問題の詳細を突き詰めて考え、すぐれたテクニックで解決してゆくタイプです。それに対し「積分型」とは、問題をより広い観点から見渡して、進むべき方向や全体の整合性を考えるタイプです。前者は「X」、後者は「Y」、といえるかもしれません。両方の眼をもつのが、真に有能な研究者なのですが、そんな人はまれで、どうしてもどちらか得意な方法にかたよるようです。

私は、後者の「積分型」で、研究の流れを見ながら、まだ誰も気がついていない問題、今後重要になりそうな問題を考えていきました。個々の問題を解く力が弱いので、「微分型」の研究者と競争しては負けてしまうためです。一般に、「微分型」の人は数学的能力や直感にすぐれており、私はいつもコンプレックスを感じていました。ある問題を議論し始めると、私は考えるのに時間がかかって、

途中でついていけなくなるからです。はじめはこのことに大いに悩みましたが、人それぞれに考える道筋や進め方が違うだけだ、と考えることにしました。私は私に合った問題を探そう、と。

このような考え方・見方の二つのタイプは、研究だけに限らないと思います。クラスの行事でも、勉強の進め方でも、部分をきちんと押さえるタイプとまず全体を見ようとするタイプの人がいるでしょう。人には、それぞれ得手・不得手^②があり、それは何も頭の良さと悪さとは関係がないのです。不得手なことを頭が悪いと自分で勝手に決め込んで、それ以上努力しないのはよくありません。自分にとって得意な進め方を探し出す努力をすることが大切だと思います。

宇宙のことを研究していると話すと、「小さいころから星が好きだったのですか?」と、よく尋ねられます。実際、天文学者には子供のころから望遠鏡で星を眺め、そのまま天文学を研究するようになった人が多いのです。だから、他の人から見ると、天文学者というのは「幼いころからの夢を追っかけてきた幸福な(変わった?)人間」^③と考えるのでしょうか。

C、「残念ながら、私はそのようなロマンティックな人間ではありません。今でも、望遠鏡をのぞかない、星座の名前も知らない天体物理学者です」と答えています。昔天文少年でなく、天文観測をしない天文学者も多くいるのです。だから私たちは、天文学と呼ばず、天体物理学とか宇宙物理学と呼ぶことにしています。

第三章で述べるように、自然科学のルーツは、中世の錬金術・永久機関など少しかがわしい試みにあり、やがて自然観察の基礎となった博物学として集大成されました。「星を眺めるのが好き」という、いわば博物学的な興味は、自然を研究する第一歩なのです。

D、博物学だけでは、ものの一面しかわかりません。

I この二つの方法は、日常生活の中でいろいろと経験することですね。例えば、設計が好きなのか、製作が好きなのか、あるいは、台本を書くのが得意なのか、演ずる方が得意なのか。どちらも大事なのですが、さて自分には、どちらが合ってるか、どちらが得意なのか、を判断するのが大切だと思います。私は、そもそも実験が下手だし、注意深くもないので、直接自然の対象に接する分野はまずダメだろうと考えていました。

II 物質そのものの成り立ちや、その運動の本質をとらえる基本的な原理や法則を見いだす物理学^④(かつて「窮理学^{きゆうりきがく}」という日本語が使われました)の目で、自然を見直す必要があります。この物理学の方法により、多種多様に展開する自然が、単純な原理や法則から

理解でき、導き出せるのです。宇宙で見いだされる現象を物理学の手法で理解しよう、というのが天体物理学とか宇宙物理学なのです。むろん、宇宙の観測が基礎にあるのですが、机の上で考えるときは個々の星や銀河の特性を忘れ、一般的な性質を明らかにすることを目標にしています。だから、望遠鏡をのぞかなくても研究ができるというわけです。

III このように、自然科学には大まかに、現象や対象そのものに興味をもって観測・観察・実験し、そこから共通性や規則性を発見してゆく方法(これを「帰納的方法^{きくわてきふほう}」といいます)と、基本的な原理や法則を推論し、具体的な現象や対象に適用してそれを理解する方法(これを「演繹的方法^{えんえききふほう}」といいます)があります。むろん、その中間の方法もありますが、分野や研究の発展段階により、どちらかに重点がおかれています。

(池内 了『科学の考え方・学び方』による)

問一 空欄 A・B・C・D にあてはまる言葉として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア 例えば イ しかし ウ それで エ さて オ そのとき カ このように

問二 空欄 X・Y にあてはまる語句として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度用いてはいけません。

ア 虫の眼 イ 鳥の眼 ウ 人類の目 エ 神の目 オ 生物の眼

問三 線①「このこと」とはどのようなことですか。文章中の語句を用いて、四十字以内で書きなさい。

問四 線②「得手・不得手」の語句の関係と異なる組み合わせを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 偶然・必然 イ 熟練・未熟 ウ 進化・退化 エ 技量・腕前 オ 消極・積極

問五 ー線③「物理学」とありますが、それはどのような学問ですか。「学問」に続くように答えなさい。

問六 段落Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを文章の流れに合うように正しく並べ換えなさい。

Circumstance	All respondents (%)	Police officers (%)	Non-police officers (%)
Self-defense	~95	~95	~95
To protect others	~85	~85	~85
To stop a crime	~75	~75	~75
To punish someone	~45	~45	~45
To show authority	~15	~15	~15

11

學問